

1号住居址カマドたちわり(北より)



4・5・6・8号住居址(東より)



15号住居址(南より)



3号溝址断面(南より)



15住-4



15住-5



26住-6



44号住





ミヅ8-1



(土錘)



(灰釉坏)



その他の遺物



ミヅ21-1



ミヅ3-1



ミヅ3-2



ミヅ3-8



ミヅ3-9 (1:1)



ミヅ6-3

## 6 北村遺跡 発掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 <sup>あはき</sup>粟佐遺跡群<sup>きたむら</sup>北村遺跡 (市No28—11 調査記号KTM)
- 2 所在地及び  
土地所有者 更埴市大字粟佐字北村道南・北村道北  
長野県
- 3 原因及び  
事業者 公共事業=都市計画道路粟佐橋線建設工事  
更埴建設事務所
- 4 調査の内容 全面発掘調査(300㎡)
- 5 調査期間 平成元年8月17日～同年9月16日(11日間)
- 6 調査費用 総額1,250,000円 全額事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 佐藤信之  
調査員 賛田 明 小野紀男  
補助員 笹澤正史  
参加者 市川睦雄 内山はつ 北川原竹子 越石久子 小林千春  
小林芳白 高橋八重子 西沢秀雄 依田保子
- 8 種別・時期 集落址 古墳時代
- 9 遺構・遺物 古墳時代住居址4棟  
時期不明馬骨集中区1ヶ所  
出土遺物総数 古墳時代土器コンテナ4箱  
獣骨コンテナ5箱

## II 調査の経過

昭和63年11月7日に国道県道河川改修等に係る開発事業の埋蔵文化財保護協議が行われ、都市計画道路栗佐橋線については、試掘調査を早急に行い、再協議を行うこととなった。11月15日に試掘調査を実施したところ、古墳時代の住居址が検出されたため、12月10日に改めて協議を行い、発掘調査を実施し保護にあたることとなった。12月14日に更埴建設事務所との協議で、発掘調査は8月から9月に実施、また当該地は更埴市の主要道路であり、通行止めにするのができないため、工事の進行に合わせて片側ずつ行うことになった。平成元年に入り、市教育委員会では調査計画書を作成すると共に、日程の調整に入った。6月1日に工事実施前の打ち合わせを行い、6月13日に57条の通知があった。7月7日に地下埋設物の工事に伴い東側部分の立会調査を行ったが、埋蔵文化財は確認されなかった。8月8日に98条を提出し、8月17日に更埴建設事務所長と更埴市長の間に発掘調査の委託契約が締結されその日から南側部分の調査に入った。8月24日に南側部分の調査を完了し、9月16日には北側部分の調査を完了した。

## III 調査日誌

- 8月17日 南側部分より調査を開始したが、調査予定地の約半分はすでに破壊されていた。
- 18日 住居址と思われる落ち込み検出、馬の骨出土。
- 21日 1号住居址より実測開始。
- 24日 馬の骨を取り上げ、南側部分の調査を完了する。
- 9月9日 北側部分調査開始、重機により表土除去。
- 11日 作業員入り遺構検出。
- 12日 遺物が集中する部分検出。
- 13日 測量用基準杭設定。
- 16日 実測、馬の骨の取り上げを行い調査完了する。

#### IV 遺跡の環境

北村遺跡は、大きく栗佐遺跡群として包括することができ、その遺跡群の北端を占めている。遺跡群は北流する千山川が善光寺平へ入り、北東に流れを変える屈曲部の右岸に形成された微高地上に位置する。標高360m前後となり、東西0.5km南北1kmほどの拡がりを持ち、東は屋代遺跡群へと続いている。また左岸となる長野市側の微高地上には、塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群といった大遺跡群が拡がっている。

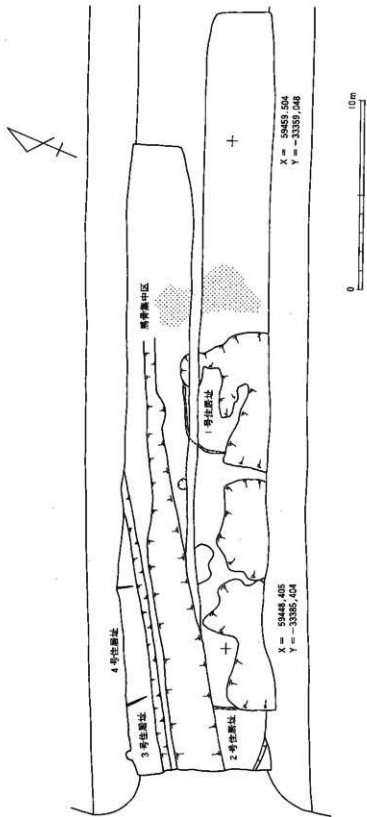
遺跡群内ではこれまでに、屋代小学校、屋代南高等学校の改築に伴う五輪堂遺跡の調査が7回行われたのを始め、戸崎遺跡・南沖遺跡の調査が行われ、200棟を超える竪穴式住居址の他、掘立柱建物址など多数の遺構が検出された。これらの調査により、弥生時代から中世に至る大集落址であることが確認されている。

北村遺跡からは、昭和30年代当時としては、県下でほとんど出土例のない灰釉陶器の把手付広口瓶と薬壺が完形で出土しており、注目されていた。しかし遺跡の大半は宅地として利用されているため、発掘調査が行われたことはなくその性格は不明であった。



1 北村遺跡 2 五輪堂遺跡 3 戸崎遺跡 4 南沖遺跡 (1:10,000)

第52図 遺跡位置図



第53圖 遺構全体図

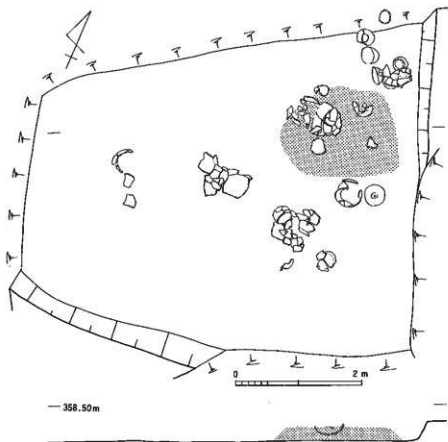


## V 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は住居址4棟と馬骨集中区であったが、擾乱が激しく、部分的に検出したにすぎない。

2号住居址 調査区東端の南側より検出されたものである。東側と南側の一部に壁と  
(図版57・58・61・63・64) と思われる部分を検出したが、他は擾乱等により失われており、規模などは不明である。また北側の4号住との切合い関係も、中央部分に水道管・ガス管・U字溝の埋設があり破壊されているため定かでない。砂層中に掘り込まれているため床面は軟弱で、堅く締まった部分はない。土器の集中部分には一辺約1mの範囲に厚さ10cmほどの焼土が堆積していたが、床面と思われる部分は焼土化していなかった。

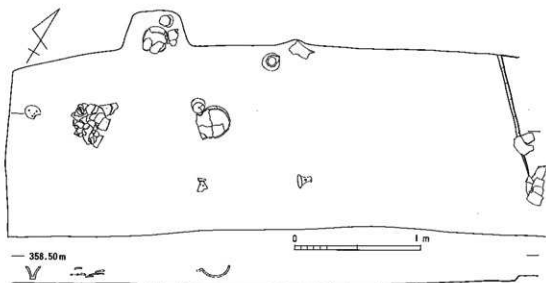
出土遺物は多く、しかも完形に近い状態で出土している。1～6は土師器環で、1は体部下半に稜を有し口縁部は直線的に外開している。2・3は口縁部が「く」の字状に外反するもので、4～6は口径に対して器高が



第54図 2号住居址

大きく陥状を呈している。いずれもミガキが施されているが、1～3はいねいに行っているのに対して4～6は荒い。1には放射状の暗文が施されている。7～13は高坏で、坏部は外面に稜を持たない7～9、1段の稜を持つ10、2段の稜を持つ11があり、9は内面黒色処理が施されている。脚部はいずれも「ハ」の字状に大きく開いており、大型の12は内面にハケナデを残している。14・15は単孔の瓶で、体部は14が直線的、15は内弯気味に開いている。16は内面黒色処理された鉢で、内外面ともミガキが施されている。17～20は甕で、球形胴となる17と長胴となる18がある。17には荒いミガキが施されているが、他はナデで器面を整えている。21～23は壺で、球形あるいは扁平な球形となる胴部の中央付近に最大径を持つ。21・22の口縁部は「く」の字状に外反しており、22は外面に段を有している。短頸壺である23の口縁部は、胴部より垂直に立ち上がり、そのまま口縁端部となる。外面はいずれも丁寧なヘラミガキが施されており、23の内面は黒色処理がなされている。

3号住居址 調査区西側より検出された住居址で、南側は埋設物によって破壊されており、北側は調査区外へと続いている。西側は4号住居址に切られているため、検出できたのは東壁の僅かな部分にすぎない。したがって住居址の規模等は一切不明である。壁高は7cmほどを測ったが、床面・壁面とも軟弱であった。炉・柱穴といった施設は検出されていない。

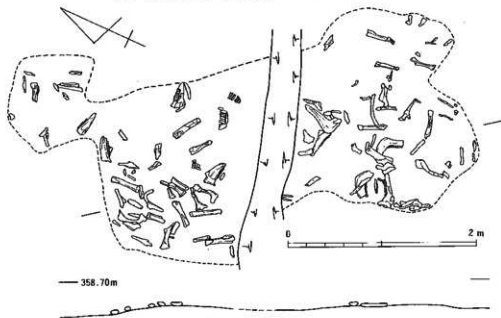


第55図 3号住居址

検出された床面は僅かであったが、出土遺物は多く完形に近いものが多い。1～4は器台である。1～3は器高が8cm前後と小さく、坏部と脚部の大きさに差がない。したがって上下関係が明確でないが、内弯気味となる部分を坏部とした。4は直線的に外開する脚部で、2段に6孔の透しがあけられている。いずれも底部に5mmから1cmの円形の透しがあけられており、器面はナデ調整で、ミガキは見られない。5・6は器台あるいは高坏の脚部で、共に外反して開いており、3孔の円形透しがあけられている。外面はヘラミガキにより整えている。7～11は球形胴となる甕で、最大径を胴部中央付近に持っている。口縁部は「く」の字状を呈しており、段を有する9を除き、外反してそのまま端部に至る。全形を知り得た3点のうち、7を除いて明確な底部を持っていない。器面は外面がハケ、内面はハケ・ナデ・ケズリで整えている。

馬骨集中区 調査区東側より検出されたもので、東西2m南北5mほどの範囲から、  
(図版62) 馬の骨が集中して出土した遺構である。砂層中より検出されたもので、掘り込みなどは検出できなかった。また下部は河原石となるが、特に敷いたものではなく、自然の堆積と思われる。

馬は頭骨から見て5頭前後と思われるが、かなり散在しており1頭ごとに埋められたとは思えない。また各馬が時間差を持って埋められたものではなく、同時あるいは短期間に埋められたものと思われる。



第56図 馬骨集中区

## VI ま と め

都市計画道路栗佐橋線建設に伴う昨年度までの調査では、埋蔵文化財の存在を確認することはできなかったが、今年度の調査では、多数の土器が完形に近い状態で出土し、馬の骨も多量に出土した。しかし市街地のため、攪乱が激しく、また車線ごとに調査を行ったため、遺構の把握が難しく、住居址の形状などは判明しなかった。

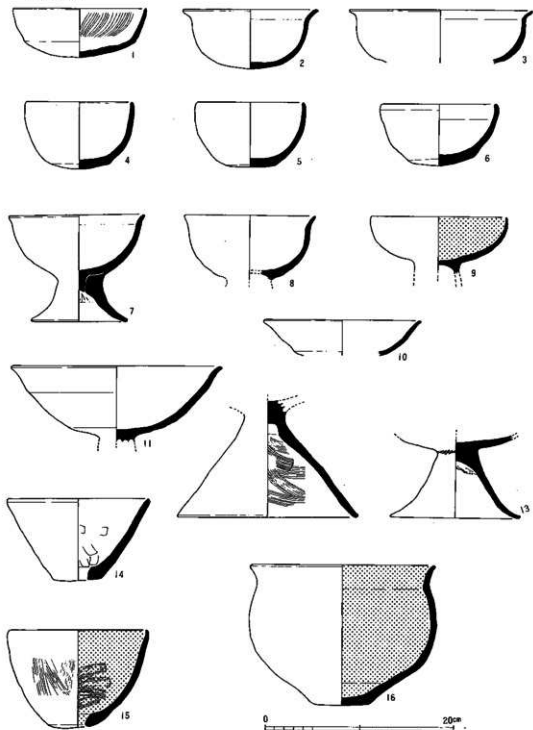
検出された4棟の住居址は、いずれも古墳時代の住居址で、このうち特に注目されるのは3号住居址である。甕を見ると底部が平底となり、口縁部が外反する土器群の中に、丸底で口縁部が内湾気味に開くもの（図版59—9）が見られる。胎土は他の土器と変わらないが、器厚が薄く外面は細かなハケ、内面はケズリによって整えており、布留式土器の影響を強く受けているものと考えられる。普光寺平では極めてまれな資料である。また6点出土した器台の中にも、器高が小さく脚部と環部の径にあまり差がないものが含まれており、形状だけを見れば在地の土器とはやや異なっている。共に編年を考える上で重要な資料といえる。

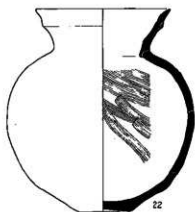
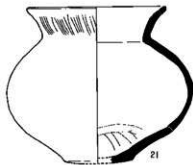
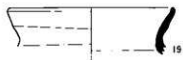
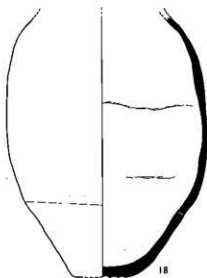
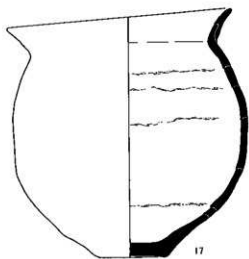
2号住居址とした一群の土器は、ほとんどが完形での出土であり、僅か3mほどの範囲より出土している。遺構中には焼土が厚く堆積しており、祭祀的な性格を考えるべきかもしれない。

馬の骨は共伴する遺物がまったくなく、伝承などもないという。したがって時期については明確にできないが、骨の状態から見て中世以後のものと思われる。興味深いのは東側200mほどにある須々岐水神社との関係である。この神社は千曲川の洪水を免れるために、祭られた神社とされている。馬は古代より水霊信仰の対象であったため、今回出土した馬の骨と須々岐水神社との間に何らかの関係があったとは考えられないだろうか。

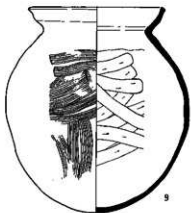
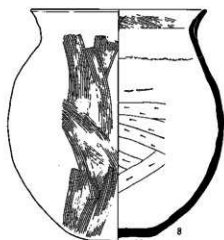
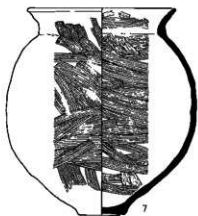
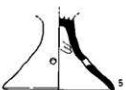
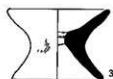
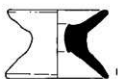
今回の調査で攪乱とした中には、自然的作用によって遺構を壊しているものも含まれている。たとえば2号住居址の東側に見られるものは、均一な砂を覆土としている。また五輪堂遺跡では、部分的に砂礫が堆積しているのも見られた。千曲川の堆積浸食によるものと思われるが、層としての連続性が見られず、どのような状態で形成されたのか理解できない。

2号住居址





3号住居址





調査区南側全景



調査区南側調査風景





調査区北側調査風景



2号住居址遺物出土状態



3号住居址遺物出土状態



馬の骨出土状態



57-1



57-2



57-5



57-14



57-7



57-15



57-16

2号住居址



58-23



58-21  
2号住居址



58-22



59-1



59-2



59-7



59-9

3号住居址

## 7 荒井遺跡 発掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群荒井遺跡 (市No.31-5 調査記号ARI)
- 2 所在地及び  
土地所有者 更埴市大字屋代字荒井  
長野県土地開発公社
- 3 原因及び  
事業者 公共事業=高速道関連・松代電子株式会社工場建設工事  
長野県土地開発公社
- 4 調査の内容 全面発掘調査 (1,200㎡)
- 5 調査期間 平成元年9月18日～同年12月21日
- 6 調査費用 総額3,600,000円 全額委託者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 佐藤信之  
調査員 山根洋子 小野紀男  
補助員 笹澤正史  
参加者 市川睦雄 内山はつ 加古 茂 久保啓子 越石久子  
小林敦彦 小林千春 小林芳白 佐々木佳子 白石正生  
高野貞子 高橋八重子 中村久美子 中村文恵  
宮入由枝 宮崎恵子 村山 豊 依田保子
- 8 種別・時期 集落址・城館址 弥生時代～中世
- 9 遺構・遺物 弥生時代 住居址4棟 埋設土器1基  
古墳時代 住居址1棟  
平安時代 住居址1棟  
中世 大溝(堀)1基  
出土遺物総数 土器片コンテナ15箱  
石器他コンテナ1箱

## II 調査の経過

昭和63年12月10日、県教育委員会と関係機関により、高速道関連事業に伴う埋蔵文化財の保護協議が行われた。12月14日に県より発掘調査を実施するよう回答があったため、12月26日、庁内関係各課により、打合せを行った。平成元年に入り、1月18日再度協議を行い、調査計画書を県に提出した。当初工事の着工が8月末に予定されていたため、7月から調査を予定したが、用地買収等の関係で9月にならないと調査に入れないことになった。9月4日、長野高速道事務所より57条の提出があり、工事面積の変更があったため、至急調査計画を変更した。9月18日、98条を提出し、長野高速道事務所長と更埴市長の間に、調査費用6,400,000円で発掘調査の委託契約が締結され、発掘調査を開始した。10月24日、調査区内に作物が残っており、調査ができなくなったため、一旦調査を中止し、12月13日から再び調査に入った。12月21日に無事発掘調査を完了することができたが、調査区内の北側はすでに土取りにより、破壊されていたため調査は不要であった。したがって、平成2年2月26日に契約額を3,600,000円に減額変更した。

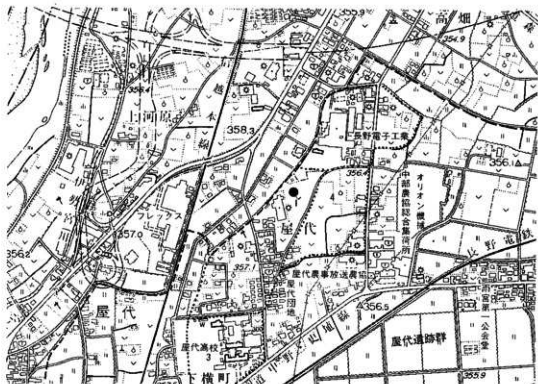
## III 調査日誌

- 9月18日 作業開始、重機入れ表土除去。北側はすでに土取りにより破壊。  
22日 5号溝址掘り下げ開始。  
27日 1号住居址より住居址の掘り下げ始める。  
10月2日 21号土坑より炭化した麦出土。  
3日 測量用基準杭設定、遣り方を組む。  
5日 北側より実測開始。  
16日 全体写真撮影のため、調査区内精査。  
18日 出水の中5号溝址掘り下げ完了。  
20日 掘り下げ作業完了、作業員は今日までとする。  
24日 実測を行い、北側については調査完了とする。  
12月13日 残っていた南側の部分調査開始。  
16日 平板により実測開始。  
21日 無事調査完了、埋め戻しの用意。

#### IV 遺跡の環境

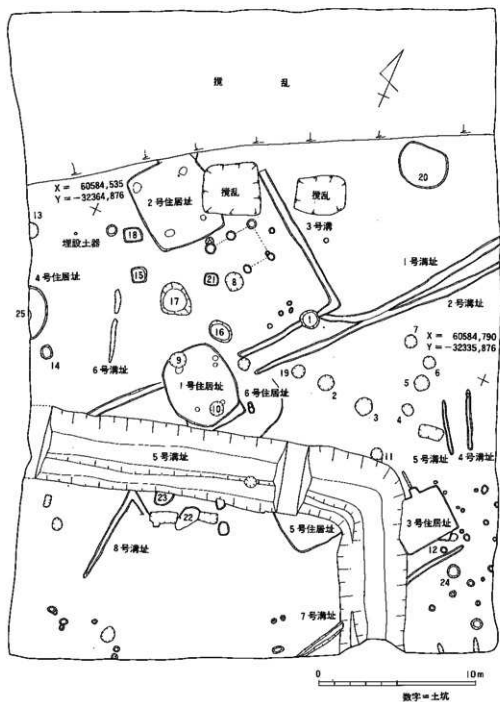
荒井遺跡は、善光寺平南端となる更埴市大字屋代字荒井地籍に位置している。千曲川が善光寺平に入り、北東へと屈曲する部分の東岸には、長さ2.5km、幅300mほどにわたって大きな自然堤防が形成され、現在は畑地として利用されている。遺跡は自然堤防中央部内側にあり、標高356.5mほどを測る。調査地の北側は約1.5m下がり、自然堤防内側の水田面となる。

自然堤防上には、城内・生仁・灰塚・馬口遺跡等縄文時代後期から中世に至る遺跡が展開しており、大きく屋代遺跡群として捉えられている。また、自然堤防の後背湿地には、更埴条里水田址が広がっている。荒井遺跡に東接する城内遺跡は、古くから遺物の出土が知られており、昭和32年から35年には善光寺平初の学術調査が実施されている。昭和62年に行われた詳細分布調査の際には、荒井遺跡にも4ヶ所のトレンチが設定され、弥生時代中期と平安時代の住居址、中世の大溝が確認されている。また城内遺跡を中心とした地域には、中世に屋代一帯を支配した屋代氏の居館(城)が構えられたと考えられている。



1 荒井遺跡 2 城内遺跡 3 馬口遺跡 4 松ヶ崎遺跡調査地点 (1:10,000)

第57図 遺跡位置図



第58图 遺構全体图

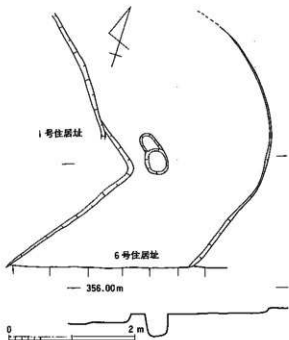


## V 遺構と遺物

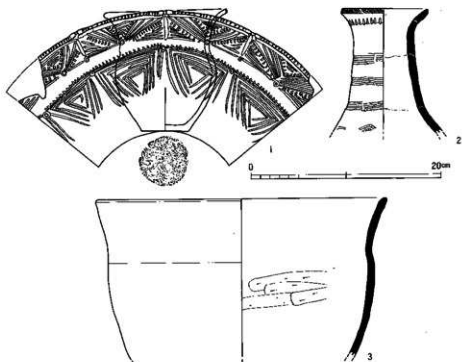
今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期の住居址4棟、古墳時代の住居址1棟、平安時代の住居址1棟、土坑24基、溝7基などである。調査区の北側はすでに土取りにより破壊されており、遺構を検出することはできなかった。

6号住居址 (図版75) 調査区中央南寄りから検出された住居址で、1号住居址に切られている。深さが5cmほどしかなく、壁の立ち上がりも明確でないため、明らかに住居址と断定することはできないが、直径5mほどの円形の住居址が考えられる。中央部分に瓢形の掘り込みが見られるが、住居址との関係は不明である。また炉などの付属施設は検出されておらず、床面も軟弱で特に締まった部分などはなかった。

出土遺物は少なく、図示した遺物以外にはほとんどない。1は小形の甕で、口縁部を4等分し、斜行する沈線あるいは列点文で埋め、交点となる部分は頂部を突き刺したボタン状の貼付を行っている。胴部も同様に4等分され、頸部との境には列点文を施し、沈線による三角形を重ねた文様で埋めている。口縁端部には刻みを施し、底部には布目とともに種子状の圧痕が見られる。2は壺の口縁部から頸部で、面取りされた端部にはRLの縄文が施され、頸部との境には刺突が巡らされている。頸部には5本が1単位となる構齒状工具により、平行沈線が3条施され、僅かに残った胴部には同一工具による波状文が見られる。3は口縁部が開いた甕で、頸部に僅かな稜が見られるが無文である。胎土中に砂を多く含んでおり外面には荒いミガキを施している。



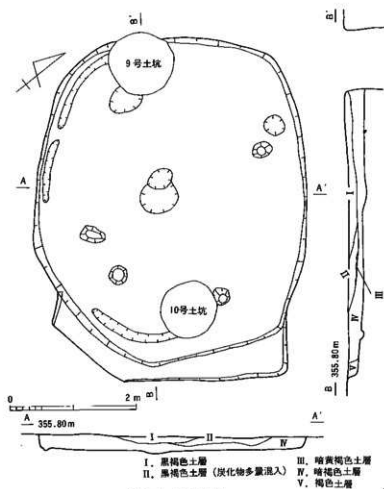
第59図 6号住居址



第60図 6号住居址出土遺物

1号住居址 調査区中央南寄りから検出された住居址で、9・10号土坑が重複している。(図版65・71・75) 規模は長軸5.2m、短軸4.3mの楕円形で、長軸方向をN-57°-Wに持つ。壁は北側が明確に検出できたが、南側は6号住居址と重複しているため不明確で、一部掘り過ぎた部分がある。床面は凹凸があったが顕著で良く締まっていた。西壁から僅かに入った部分には幅10cmほどの周溝が巡らされている。柱穴は南側から3本、北側から1本検出されており、深さは50-30cmであった。中央部分に炉と思われる15cmほどの掘り込みが見られるが、焼土等は検出できなかった。

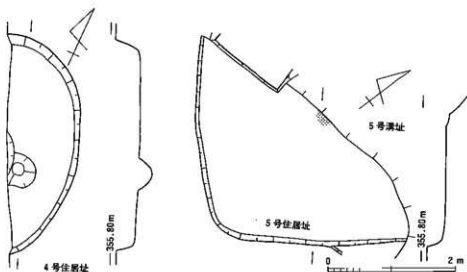
出土遺物は少ない。1-3は小型の甕で、1は最大径を口縁部を持つが、2・3は口縁部と胴部径がほぼ同じとなる。いずれも胴部には櫛描羽状文を配しているが、3はやや乱れている。4も甕で頸部には櫛描波状文が施され胴部には縦位の櫛描羽状文が見られる。5・6は壺と思われる破片で、太い沈線で画された内側には、縄文や櫛描文が施されている。7は石皿状の軽石製品で、直径28cmほどを測ることができる。厚さは5cm前後で両面とも研磨痕が見られるが、用途は不明である。



第61図 1号住居址

4号住居址 (図版65・75) 調査区西側より検出された住居址で、半分以上が調査区外にあり、中央部分には住居址を切って作られた25号土坑が僅かに検出されている。調査部分から、直径3.5m程の円形の住居址と考えられる。床面は中央部分に進むにしたがって深くなっており、壁高は40cmほどを測る。床・壁ともに顕著であったが軟弱であった。床面には柱穴と思われる深さ20cmほどの掘り込みが検出されている。

出土遺物は少ない。1は頸部に櫛描波状文が施された甕で、胴部は頸部と同一工具により、格子状に櫛描文を施している。強く外反した口縁の端部には刻みが付けられている。2は壺の胴部で文様は見られないが、良く磨かれている。



第62図 4号・5号住居址

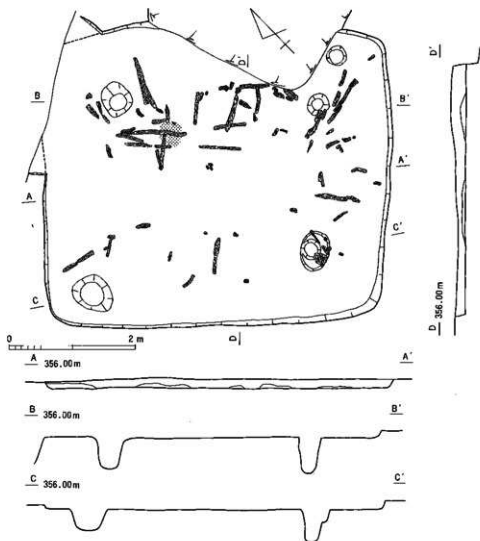
5号住居址 調査区南側より検出された住居址である。5号溝址に切られているため(図版65) 規模は明らかではないが、胴張りの隅丸方形になるものと思われる。床・壁とも顕著で特に床面中央部分は良く締まっていた。壁高は25cmほどで垂直に近く立ち上がっている。住居址の中央になると思われる所から溝に切られて地床炉が確認された。

出土遺物は少ない。1は壺の胴部で、外面は良く磨かれており、6本の沈線が胴部上半に巡らされている。

2号住居址 調査区北側より検出された住居址で、東壁の一部が攪乱されていたが、ほぼ全容を知ることができた。規模は5.5m×4.8mでやや胴の張った方形となり、主軸はN-50°-Eに持ち、壁高は最大15cmを測る。壁・床とも顕著であったが、さほど締まっていたはなかった。柱穴は5本確認されているがP<sub>5</sub>は深さ8cmほどで、上屋を支えた柱穴とは思えない。したがってほぼ方形に配された4本が主柱穴となる。深さは60~40cmで、P<sub>5</sub>は2段に掘り込まれていた。炉は中央から北東に寄った部分に作られた地床炉で、掘り込みなどはない。焼失住居址と思われ、床面には広範囲に炭化物が拡がっており、放射状に拡がる炭化材も検出されている。

出土遺物は少ない。1は高坏で坏部は2段成形されており、脚部は中膨らみとなる円筒に大きく開く裾部分が付けられている。調整は荒く、ミガキは施されていない。2・3は壺の胴部から底部で、扁平な球形胴となる

と思われる。2はヘラミガキ、3はナデで器面を整えており、内面には接合痕を残している。4・5は甕で共に胴下半部を失っているが、球形胴になるものと思われる。胴部より「く」の字状を早して口縁端部に至るが、4が直線的に開くに対して5は外反している。器面調整は4にヘラミガキが施されているが、5はハケをそのまま残している。

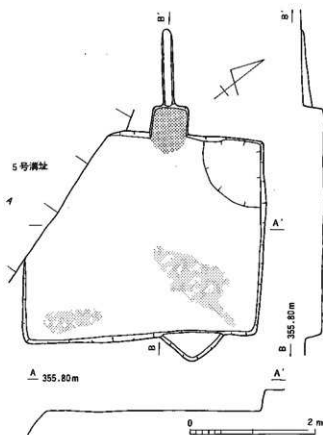


第63図 2号住居址

3号住居址 調査区南東より検出された住居址で、北西隅は5号溝址に切られており、南壁では12号土坑と重複している。規模は3.8×3.3mの不整形形で、主軸をN-54°-Wを持つ。壁高は35cmほどで、壁・床ともに顕著であった。北壁中央部分に幅60cm、長さ45cmほどの突出部を作りカマドとしている。壁面は良く焼けていたが、石などの利用は見られなかった。煙道は、幅約20cmでカマドより直線に1.2mほど延びている。北東隅の床面が10cmほど低くなっており、貯蔵穴的な機能が考えられる。また南側の床面には炭化物が拡がっており、焼失住居址の可能性がある。

出土遺物は極めて少なく、平安時代と思われる土師器・須恵器の小破片があったが図示できるものはない。

埋設土器 調査区北西より検出された遺構である。底部を上面に据え、副中央部分より上半を欠き、検出面より8cmほどが埋まっていた。土器内部の土壤に



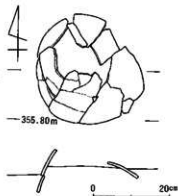
第64図 3号住居址

器面にはハケを顕著に残しており、ミガキは観察できない。胴部上半には櫛描の沈線が斜めに施されており、羽状を形成していたものと思われる。

16号土坑  
(図版66・76)

調査区中央1号住居址の北側より検出された遺構である。北西に長軸を持つ卵形を呈しており、160×115cmほどを測る。深さは40cmほどであり、壁・底部とも顕著であった。覆土は漆黒で炭化物が含まれていた。

出土遺物は復元できるものはなかったが、量は多かった。1は壺の頸部で沈線の間に鋸歯文を施している。2・3も壺の破片で、2は器面にLRの縄文を施し、太い沈線の間には列点文が見られる。3は胴下半部でRLの縄文と沈線が施されている。4は甕の口縁部で端部にはRLの縄文を施し、胴部には櫛描羽状文が見られる。

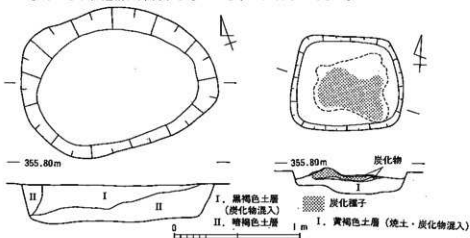


第65図 埋設土器

21号土坑  
(図版74)

2号住居址の南側から検出された遺構である。90×75cmほどの不整形方形を呈しており、深さは15cmほどを測る。底部はやや凹凸があったが、比較的顕著であった。覆土中には炭化した麦が多量に含まれており、その出土量は約5kgに達した。この麦の上面には性格の異なった炭化物があり、木皮あるいは、わらで覆われていたものと思われる。

出土遺物は炭化した麦以外に、栗林式土器と思われる小破片が数点出土しているが、遺構に帰属するものかどうかは明らかでない。

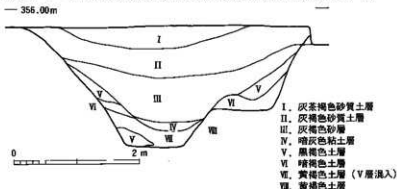


第66図 16号・21号土坑

5号溝址 調査区南側で検出された大溝である。N-78°-Eの方向に約24m延び、東側で直角に曲がり、12mほどを検出したが、調査区外へと続いている。幅約4.5m、検出面からの深さ1.9mを測ることができる。底部は出水があり明らかではないが平坦になるものと思われる。したがって断面形は逆台形状を呈していたと考えられるが、南側にテラス状の段を持つ部分があり、地点によって異なっている。土層断面を見る限りでは自然堆積であり、溝の縁の部分が壊れ、その後砂により一気に埋まったものと思われる。また覆土の大半が砂であることから、溝の付近には土塁など盛土を伴う施設はなかったものと思われる。

出土遺物は少ない。1・2は通称かわらけと呼ばれる土師質土器で、共に顕著な糸切り痕を残している。1は焼成後相対する部分に1ヶ所ずつ穿孔され、それを沈線で結んでいる。3・4は陶器の碗で、瀬戸系と思われる。出土遺物で最も多かったのが内耳鍋であったが、破片であり復元できたものは少ない。口径34.5~25cm、器高20~15cmほどで、口縁部が「く」の字状に屈曲する5~7と、屈曲が小さく直立気味となる8~11があり、口縁端部は11を除き面取りされている。器厚は11が1.5cmと厚いが、他は1cm以下である。器面はナデによって整えており、9の頸部にはヘラケズリも見られる。7には焼成後1孔を穿っている。12・13は搗き臼と思われるものの底部で、安山岩で作られている。使用面は磨滅しており、敲打痕が顕著に観察できる。13~16は石臼の破片で、いずれも雄臼と思われる。14は受け皿の部分と考えたが、鉢の可能性もある。小型の16は茶臼であろう。17は五輪塔の空風輪で他に火輪も出土しているが、セットをなすものではない。

その他の遺物 出土遺物は少なかったが、其中で多いのは弥生時代中期と考えられる土器である。1~4は荒い歯状工具による羽状文が施されたもので、縦



第67図 5号溝址断面図



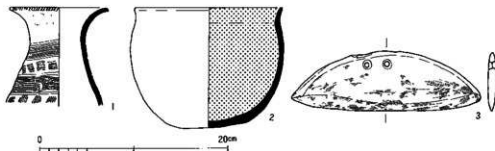
位と横位がある。口縁端部を見ると2は縄文、3・4は刻みが施されている。5～7も櫛歯状工具による文様が見られるが、黒色で胎土中に長石と思われる白い粒子が多く含まれており、搬入品とも考えられる。8～10は棒状工具による区画が施されており、9はLRの縄文が見られる。11・12も棒状工具によるもので、11は波状、12は菱形を重ねた文様を作り出している。13は口縁部に縄文が施され、口縁内部にはかえりが付けられている。14は棒状工具による横線、15は櫛歯状工具による列点文と平行沈線、16には地文にLRの縄文が施され、櫛歯状工具による平行沈線と、棒状工具による波状文が見られる。17～21はいずれも沈線で区画された中にLRの縄文が施されており、棒状工具による波状文や列点文、櫛歯状工具による平行沈線などが見られる。

第68図の1は竈で、頸部には櫛歯状工具による平行沈線を2条巡らし、間を同一工具による破線で埋め、下部は羽状文になるものと思われる。ラッパ状に開いた口縁の端部には、LRの縄文が施されている。2は1号溝址より出土した鉢であるが、流れ込みと考えられる。内外面ともミガキが施され、内面は黒色処理がなされている。3は磨製石庖丁で、両刃となる刃部は係かに外弯しており、上部には両面から穿孔された2孔が見られる。

## VI まとめ

調査地は、屋代遺跡群の中核をなす城ノ内遺跡に隣接する部分であるため、住居址等の遺構が密集していると考え、調査を開始したが、予想に反して検出された遺構は少なかった。しかし更埴市では数少ない弥生時代中期の住居址、あるいは城ノ内地籍にあったとされる居館址に関係すると思われる大溝の検出があり、調査の成果は大きかった。

弥生時代中期の住居址は4棟検出されている。うち6号住居址はプランが明確に検出できなかったが、円形の住居址と考えられる。出土遺物が新塚町式土器に近似することから、中期前半の住居址と思われる、更埴市で



第68図 その他の遺物

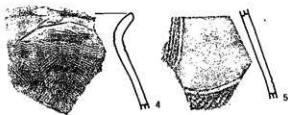
は初の検出となる。他は栗林式期に比定できる住居址で、1号住居址は楕円形、4号住居址は円形あるいは楕円形になるのに対して、5号住居址は残存部から隅丸方形の住居址が考えられる。生仁遺跡など市内から検出されている栗林式期の住居址は、いずれも円形の住居址となっている。検出された住居址が少なく、出土遺物も少ないため明らかでないが、円形と方形の住居址が共存したのか、あるいは時間差があるのか注目される。また検出された土坑のうち16・17・18・21号土坑も栗林式期に属するものと思われる。特に21号土坑からは、炭化した麦が出土している。弥生時代の麦の出土は岡谷市橋原遺跡、辰野町樋口内城館址、そして更埴市内の城ノ内遺跡から知られているが、いずれも弥生時代後期に属するものとなっている。21号土坑も栗林式期と断定できないが、覆土が他の遺構と同じ漆黒であり、僅かに出土した遺物はいずれも栗林式土器であることから、同時期に属するものと考えられる。

古墳時代の住居址が、1棟しか検出されなかったのは意外であった。北側土取り部分や周辺から、古墳時代の遺物が多数出土したと伝えられており、なぜ調査部分が空白となるのか理解できない。

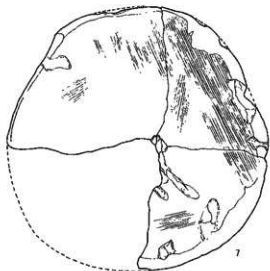
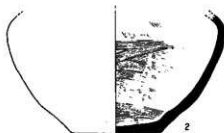
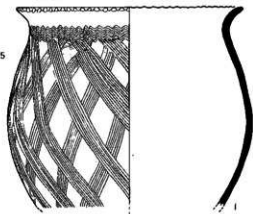
平安時代の住居址も同様である。僅か50mも離れていない松ヶ崎遺跡においては、平安時代の住居址が激しく切り合った状態で検出されている。これに対して、標高差もない同じ自然堤防上にありながら、検出された住居址は調査区南側からの1棟であり、おそらく集落の北限に当たるものと思われる。自然堤防上の土地利用はどのようであったか、今後解明していかなければならない問題である。

5号溝址はその出土遺物から見て、城ノ内にあったとされる居館址(城)に付随するものと思われる。土層断面からは水が溜められた形跡を見ることができず、空堀であったと考えられる。南接する松ヶ崎遺跡の調査の際、検出された12号溝址は、同等の規模を持っており、本溝址の延長線上にあることから、一連の溝と考えることができる。この12号溝址はコーナー部分が検出されているため、両遺跡の調査から南北60mの長さを持ち、ほぼ直角に折れて西へ伸びるものと理解される。しかしこの溝址によって囲まれた地籍は城ノ内ではなく荒井地籍であり、また松ヶ崎遺跡の調査では、他に中世と思われる大型の溝も検出されている。居館址がどの程度の規模を持っていたのか、あるいは今回検出された部分が居館址のどの部分を占めていたのか不明であり、今後の調査に期待する部分大きい。

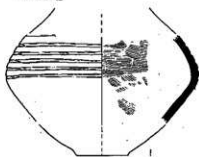
1号住居址



4号住居址

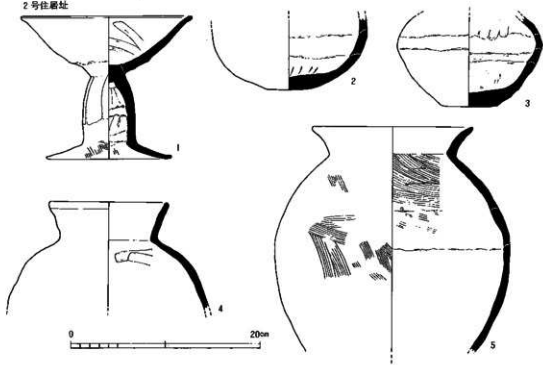


5号住居址

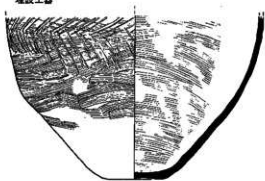


图版66

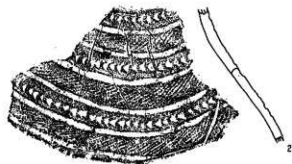
2号住居址



埋没土器

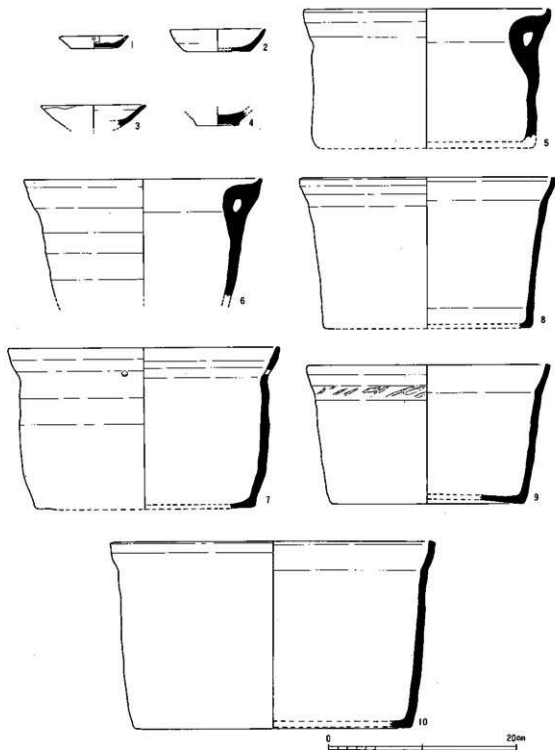


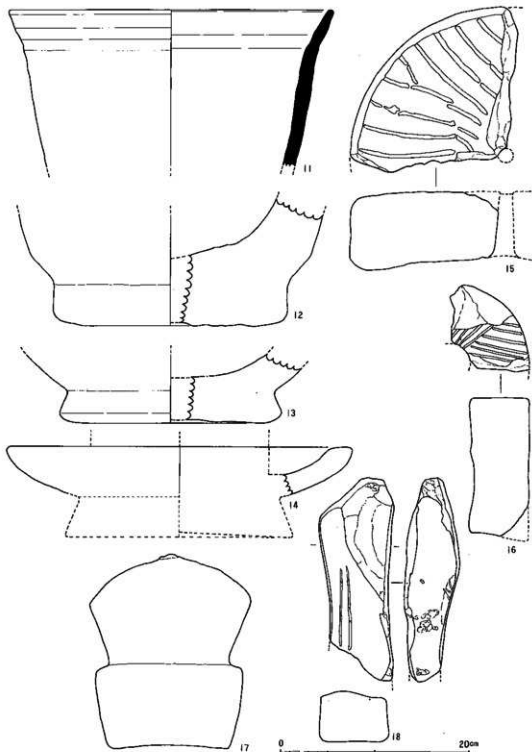
16号土坑



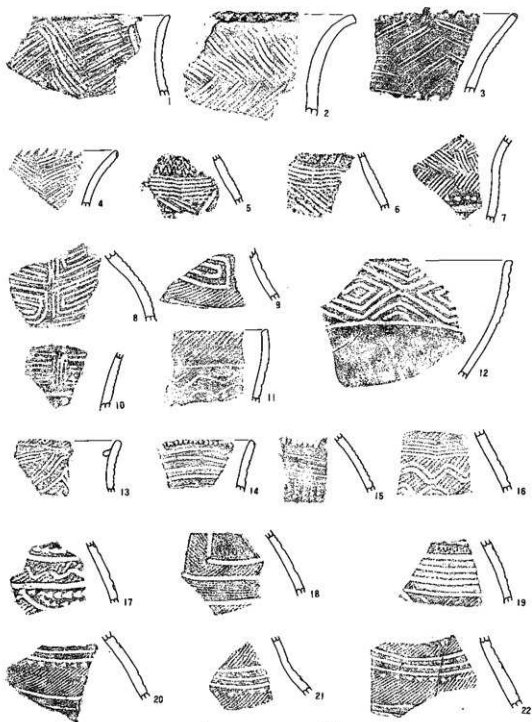
4 (2·3·4=1:2)

5号遗址





その他の遺物





調査区北側全景

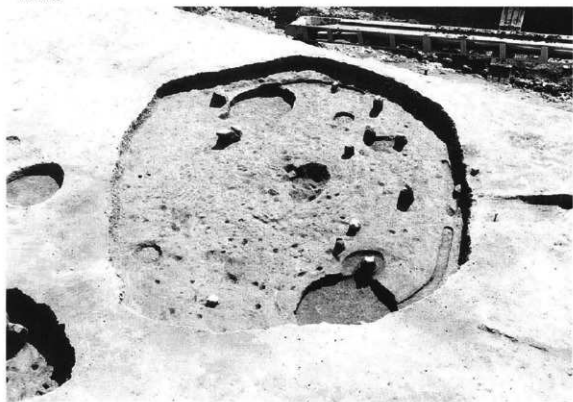


調査区南側全景

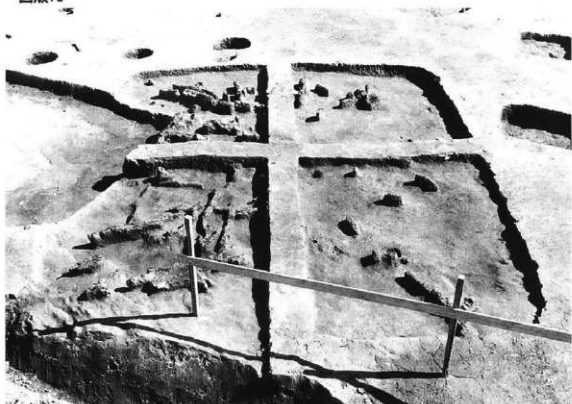




調査風景



1号住居址



2号住居址



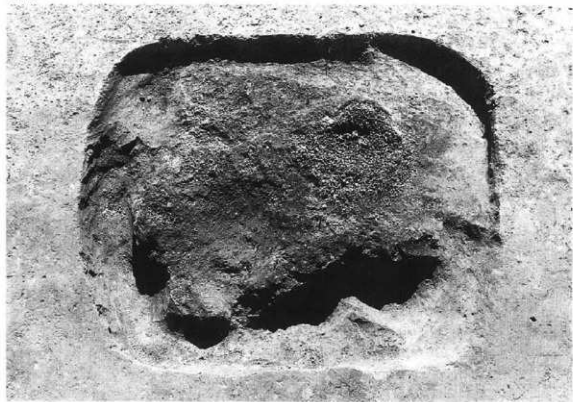
3号住居址



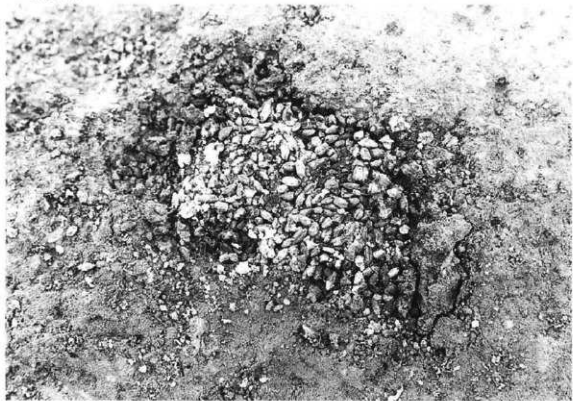
5号沟址断面



埋藏土器



21号土坑



21号土坑炭化出土状态



第60图-1  
6号住居址



第60图-2



65-1  
1号住居址



65-7



65-1  
4号住居址



66-1  
2号住居址



16号土坑



埋設土器



第68図-1  
その他の遺物



第68図-2



第68図-3



67-1



67-5



67-9



67-17



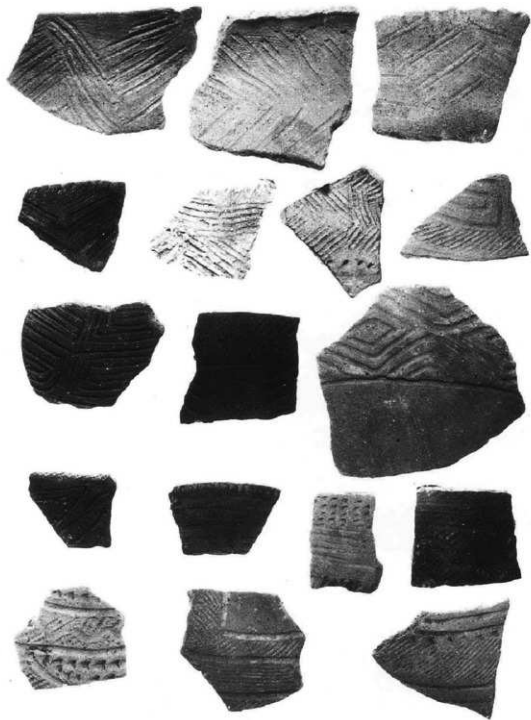
68-12



68-13  
5号溝址



68-15





## 8 古道遺跡他 発掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 原代遺跡群 古道遺跡 (市No31-8 調査記号KOM)  
同 郷津遺跡 (市No31-22 調査記号GOT)  
同 五十里遺跡 (市No31-23 調査記号IKR)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字屋代字古道・郷津・五十里  
土地所有者 中部電力
- 3 原因及び 民間事業＝中部電力鉄塔建設工事  
事業者 中部電力
- 4 調査内容 発掘調査 (130㎡ (古道・郷津)・立会調査 (五十里))
- 5 調査期間 平成元年10月25日～同年12月12日 (6日間)
- 6 調査費用 総額970,000円 全額事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 山根洋子  
参加者 市川聡雄 内山はつ 越石久子 小林芳白 村山 豊  
依田保子
- 8 種別・時期 古道遺跡＝水田址 平安時代  
郷津遺跡＝集落址 弥生～古墳時代  
五十里遺跡＝水田址
- 9 遺構・遺物 古道遺跡＝平安時代 水田畦畔  
出土遺物総数 土器片数点  
郷津遺跡＝弥生時代 住居址2棟ほか  
出土遺物総数 土器片コンテナ3箱  
五十里遺跡＝なし

## II 調査の経過

昭和63年4月21日中部電力より、屋代遺跡群内にある送電用の鉄塔3基の立て替えを計画しているため発掘調査を行ってほしいと連絡があった。平成元年5月17日、11月に工事を予定しているとの連絡があり、市教育委員会では夏場は調査が入っており、10月後半にならないと調査は実施できないと伝えた。6月7日に文化財保護法57条の提出があり、6月10日に『工事予定地は更埴糸里水田址・大塚遺跡内にあるため、発掘調査により保護にあたりたい。』と意見書を添えて県教育委員会へ提出した。6月14日、県教育委員会より、発掘調査を実施して保護にあたるよう指導があったため、調査の準備に入った。8月に入り、費用1,150,000円で、11月から調査を開始するよう調査計画書を作成し、8月30日、中部電力へ提出した。9月1日、中部電力より発掘調査について正式に依頼があり、9月20日、中部電力榑長野支店長と更埴市長との間に、委託料1,150,000円で、委託契約が締結された。10月12日、中部電力と市教育委員会による協議が行われた。10月24日に文化財保護法98条を提出し、10月25日より発掘調査を開始した。12月12日に無事調査は終了したが、当初予想されたほど遺構の検出がなかったため、平成2年1月29日、委託料を180,000円減額する委託契約の変更を行った。

## III 調査日誌

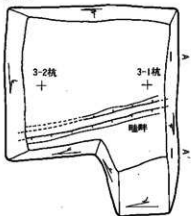
- 10月25～26日 重機が入り、表土剥ぎ（古道・郷津）。
- 30日 作業員が入り、作業を開始する（古道・郷津）。
- 11月 1日 実測（郷津）。
- 2日 杭測量・実測（古道・郷津）。現場作業を終える。
- 12月 12日 立会調査（五十里）。



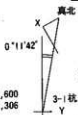
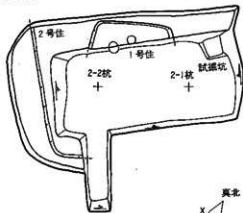
1 古道遺跡 2 郷津遺跡 3 五十里遺跡 4 馬口遺跡 (1 : 10,000)

第69図 遺跡位置図

古道遺跡



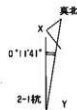
郷津遺跡



3-2坑 X = 59844,600  
+ Y = -32809,306

X = 59844,104  
Y = -32803,783

平面直角座標系第Ⅱ種系



2-1坑 X = 59716,196  
Y = -32759,705  
2-2坑 X = 59713,221  
+ Y = -32763,583

第70図 古道・郷津遺跡全体図

### III 遺構と遺物

**古溝遺跡** 厚く堆積した褐色砂を取り除くと、地表下約1.6m（標高355.80m付近）で水田の畦畔が検出された。ほぼ東西方向に走る畦畔で、幅は基部が0.9m、上端で0.4m、高さは0.2m程を測る小形のものである。畦畔の断面形は、カマボコ形を呈する。

(図版79・80)

畦畔の下層からは、畦畔築造時もしくはそれ以前に築かれたと思われる溝状遺構が検出された。溝の幅は約1.6mを測るが、工事への影響があるため、底部を確認することはできなかった。

遺物は土師器・須恵器・灰軸陶器が出土した。図示した遺物は、旧水田土壌内およびその下層より出土している。1は内面黒色処理された坏であるが、底部調整は不明である。2は底部に回転糸切り痕のある須恵器坏、3は釉が付け掛けされた灰軸陶器である。4は高台のような脚部をもった土師器である。

**郷津遺跡** 弥生時代の住居址などが検出された。

**1号住居址** 予想に反し地表下約15cmという浅い地点で検出されたため、重機で表土を削ぐ際に気づかず、その大部分を掘り抜いてしまった。一辺が約4.5mの規模で、2号住居址を切って構築されている。pitと炉が検出された。

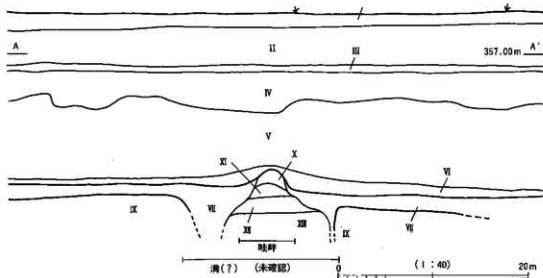
(図版79・82・84)

遺物は箱清水式土器が出土した。鉢(1)、高坏(2)は内外面赤彩されており、甕(3)の波状文は非常に細かい。4は甕だが、ススなどの付着はみられない。

**その他の遺物** 1は箱清水式土器の片口の鉢で、底部を除いて赤彩されている。2は土師器高坏の脚部、3は須恵器高盤、4は小形の灰軸陶器の碗である。5は羽口の先端で、表面は発泡している。6は南信地方にみられる弥生後期の壺の、弓円弧文と似た文様構成をもち、外面と頸部内面に赤彩が施されている。8も外面赤彩され、肩部に円形浮文をもつ弥生後期の壺形土器である。7は古墳時代前期の、北陸系装飾壺の胴部をめぐる横線文部分と思われる。外面は赤彩されている。

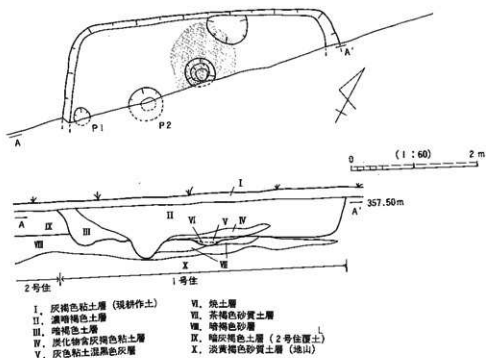
**五十里遺跡** 鉄塔の建設に合わせ立会調査を行ったが、南側の水路工事あるいは宅地造成の時に上部は破壊されており、遺構・遺物は検出できなかった。

(図版83)



- |                  |                                  |
|------------------|----------------------------------|
| I. 暗灰色粘土層 (現耕作土) | VII. 褐色混炭色粘土層 (旧水田層)             |
| II. 褐色混炭色砂質土層    | IX. 褐色・炭化物混炭褐色粘土層                |
| III. 灰色混褐色砂質土層   | X. 褐色砂混炭褐色粘土層 (VII層と似ている)        |
| IV. 灰色混茶褐色砂質土層   | XI. 褐色・炭化物混炭褐色粘土層 (IV層と似ている、やや粗) |
| V. 暗褐色砂層         | XII. 焼土塊・炭化物含む濃暗褐色粘土層            |
| VI. 褐色砂層         | XIII. 炭化物混炭褐色粘土層 (IX層と似ている)      |

第71図 古道遺跡畦畔セクション



- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| I. 灰褐色粘土層 (現耕作土) | VI. 焼土層            |
| II. 濃暗褐色土層       | VII. 茶褐色砂質土層       |
| III. 暗褐色土層       | VIII. 暗褐色砂層        |
| IV. 炭化物含灰褐色粘土層   | IX. 暗灰褐色土層 (2号住覆土) |
| V. 灰色粘土混黒色灰層     | X. 淡黄褐色砂質土層 (地山)   |

第72図 郷津遺跡1号住居址

#### IV ま と め

**古遺跡** 今回の調査はわずかな面積の調査ではあったが、平安時代に築造されたと思われる水田址が検出され、その意義は大きい。更埴条里水田址とは、何らかの関係があるものと思われる。

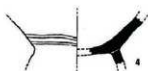
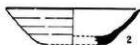
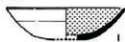
**郷津遺跡** 水田址が検出されると予想していたが、思いもかけずごく浅い面から弥生時代の住居址が検出された。この地点はほ場整備される前はクワ畑だった場所で、もともと微高地であったらしく、水田土壌は検出されなかった。このような島状の微高地が、この後背湿地内に何ヶ所か散在していたようである。住居址の下層からは暗褐色の砂層が60～80cmの厚さで検出されており、弥生時代後期以前の洪水の痕跡を示している。

古墳時代前期の北陸系装飾壺は、これまでに長野市四ツ屋遺跡<sup>(註1)</sup>などから出土しているが、更埴市内で出土したものは今回が初めてである。この掘入土器の出土により、当時の人々の活発な交流を彷彿とさせる。

註1 「四ツ屋遺跡 清野保育園地点の調査」

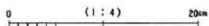
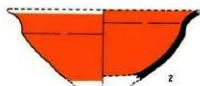
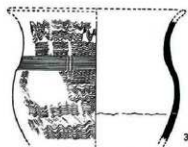
長野市の埋蔵文化財 第9集 長野市教育委員会 1980年

古道遺跡

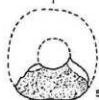


郷津遺跡

1号住



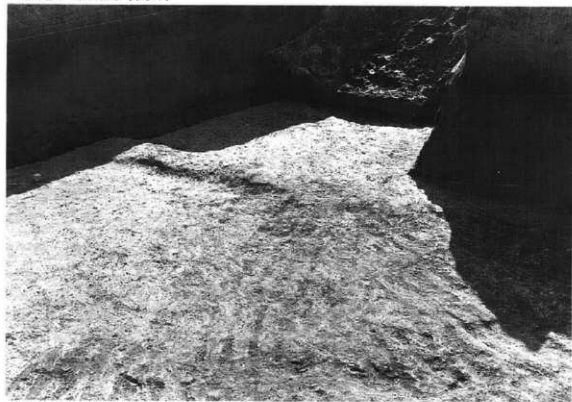
その他の遺物



(5~8=1:2)

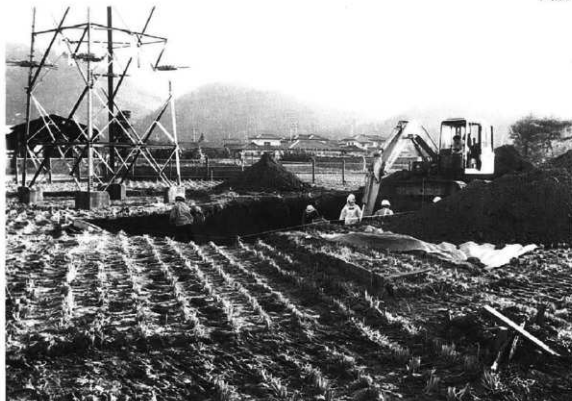


古道遺跡 水田畦畔 (東より)



同 水田畦畔 (北西より)





郷津遺跡 調査風景（北東より）



同 調査区（北より）



同 1号住居址 (南西より)



郷津遺跡 2号住居址 (南東より)



五十里道跡 調査風景 (西より)



1住-2



1住-1



その他-1



その他6-8 (1:2)

## 9 馬口遺跡 発掘調査

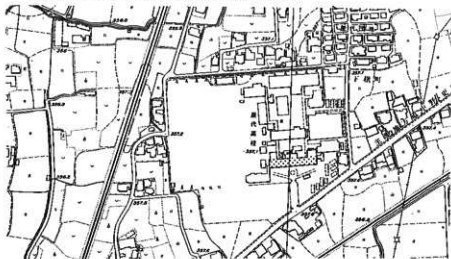
### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群馬口遺跡 (市No31-4 調査記号BGR)
- 2 所在地及び土地所有者 長野県更埴市大字屋代1000  
長野県
- 3 原因及び事業者 公共事業=長野県屋代高等学校管理混合教室棟建設工事  
長野県屋代高等学校 (1,010㎡)
- 4 調査内容 全面発掘調査 (1,000㎡)
- 5 調査期間 平成元年11月18日～同年12月8日 (20日間)
- 6 調査費用 総額3,470,000円 全額事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期 集落址・水田址 平安時代
- 9 遺構・遺物 平安時代 住居址3棟  
水田址・畦畔

### II まとめ

調査により検出された畦畔は、昭和60年の調査により検出された1号畦畔と同一のものであり、この地の地割が半折型であることを裏付ける資料となった。また住居址はいずれも平安時代の住居址であり、水田面下より検出されている。馬口遺跡内では最も東側に位置する住居址で、水田址の年代を考える上で重要な資料となる。

報告書の作成は、平成2年度に実施予定である。



第73図  
調査地位置図  
(1:5,000)

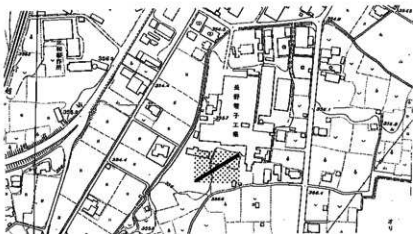
## 10 城ノ内遺跡 発掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群城ノ内遺跡 (市No31-7 調査記号SRN)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野電子工業㈱
- 3 原因及び  
事業者 長野電子工業㈱  
民間事業=工場建設事業 (4,014㎡)
- 4 調査内容 トレンチ発掘調査 (300㎡)
- 5 調査期間 平成2年3月5日～同年3月27日 (16日間)
- 6 調査費用 総額1,012,000円 全額事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期 集落址・居館址 弥生時代～中世
- 9 遺構・遺物 弥生時代～平安時代 住居址4棟  
平安時代 掘立柱建物址1棟  
平安時代～中世 溝址7基  
出土遺物 コンテナ10箱

### II まとめ

検出された住居址は、弥生時代中期1棟、古墳時代2棟、平安時代1棟である。7基の溝址の内3基は幅2mを超える大きなもので、上部を覆う砂層を覆土にもつので時期は中世と考えられ、城ノ内にあったとされる居館址との関係が注目される。調査は平成2年度も引き続いて実施予定である。

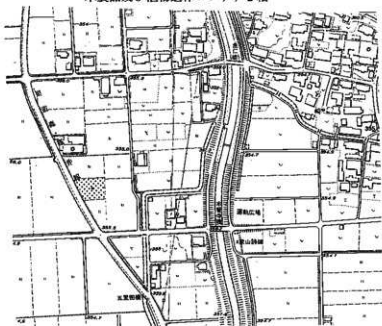


第74図  
調査位置図  
(1:5,000)

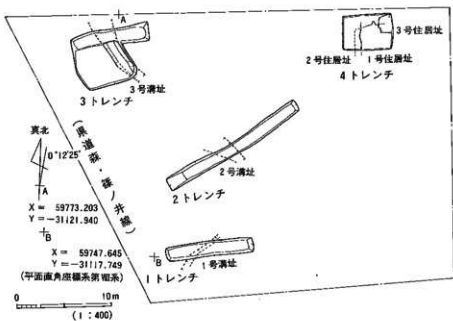
## 11 生仁遺跡 発掘調査

### I 調査の概要

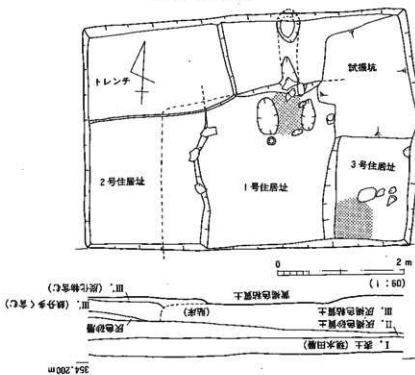
- 1 調査遺跡名 <sup>かしら</sup> 屋代遺跡群 <sup>なまに</sup> 生仁遺跡 (市No31-11 調査記号NM3)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字雨宮字生仁1594-1 他  
榎フジ総業
- 3 原因及び  
事業者 民間事業=宅地造成事業 (1,196㎡)  
榎フジ総業 近藤 洵
- 4 調査内容 トレンチ発掘調査 (73㎡)
- 5 調査期間 平成元年5月8日～同年5月13日 (5日間)
- 6 調査費用 総額350,000円 全額事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当 者 矢島 英雄  
調査 員 山根 洋子  
参加 者 酒井幸治郎 白石正生 富沢豊延 村山 豊
- 8 種別・時期 集落址・水田址 古墳～平安時代
- 9 遺構・遺物 平安時代 住居址3棟  
奈良～平安時代 溝址3基 溝址内に杭列・櫛検出  
出土遺物総数 土器片コンテナ5箱  
木製品及び植物遺体コンテナ2箱



第75図  
調査地位置図  
(1:5,000)



第76図 調査全体図



第77図 1号住居址



## II ま と め

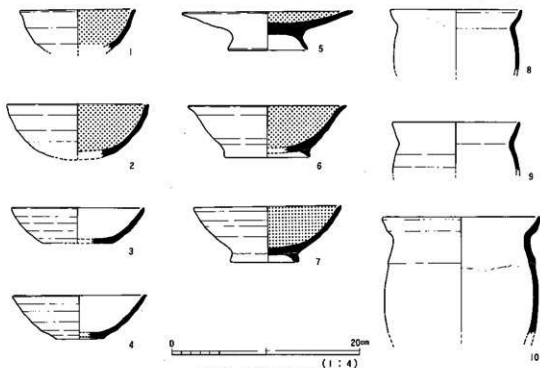
本調査地は、生仁遺跡と本誓寺遺跡の間にあたり、集落址と更埴条里水田址の境にあたると思われる地点である。

1～3トレンチ 1～3トレンチにおいては、溝址が検出された。1・2号溝址では、縁に木杭が打ちこまれていた。1号溝址は、埋没水田層下の砂層を掘り込み設けられていた。それに対し2号溝址は、砂層に覆われていた。各トレンチ共に地表下1.2～1.4m以下は、奈良～平安時代の土器片と共に枝・葉など植物遺体を多量に含む青灰色粘土層となっていた。

4トレンチ 4トレンチにおいては、新旧3棟の住居址の一部が検出された。1号住居址は、2号住居址の一部に貼り床を行い設けられたもので、カマドは裾部分が破壊された状態で検出された。

今回の調査は、出水等のため正確に水田址域と住居址域の範囲を確認することが出来なかったが、2号溝址東側の土層断面にカマドの一部が検出されたことから、本調査地の東側は住居址域であることが明らかとなった。

なお、本造成工事は、現水田面に県道面と合わせて盛土造成の上、木造住宅が建設された。



第78図 1号住居址出土遺物



1号住居址 (南側より)



3号溝址 (南側より)

## 12 町浦遺跡 発掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群町浦遺跡 (市No.31-21 調査記号MTU)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字雨宮字町浦  
更埴中部農業協同組合
- 3 原因及び  
事業者 民間事業=更埴中部農業協同組合ガソリンスタンド建設  
更埴中部農業協同組合
- 4 調査内容 全面発掘調査 (120㎡)
- 5 調査期間 平成元年10月3日～同年10月4日 (2日間)
- 6 調査費用 総額185,000円 全額事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 山根洋子  
参加者 内山はつ 加古 茂 越石久子 小林敦彦 白石正生  
高橋八重子 村山 豊 依田保子  
協力者 更埴中部農業協同組合
- 8 種別・時期 水田址 (平安時代)
- 9 遺構・遺物 水田址  
出土遺物総数 土師器・須恵器破片数点

調査日誌 10月3日 水田面が検出される。業者が入り杭を測量する。

地表下約2mで湧水する。午後一時雨。

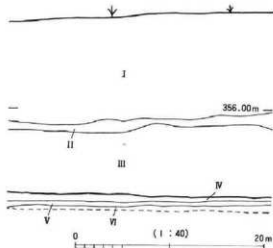
4日 水田面下の遺構の有無を確認するためトレンチを入れる。遺構が確認されなかったため、実測の後現場作業を完了する。

- ### II まとめ
- ガソリンスタンドのオイルタンク建設部分で、現地表下約1.8m (標高355.10m付近)において水田面が検出された。水田面直上までおよそ0.7mの厚さで、暗褐色砂が堆積していた。畦畔等の検出はなく、水田土壌が検出されたことにより、面として水田址を把握したものである。遺物は非常に少ない。今回調査された水田址からは畦畔が検出されなかったがこれは当初から予想されたことで、これまでの更埴条里水田址調査によって得られた成果を裏づける結果となった。面積こそわずかな調査だったが、このような調査を積み重ねていくことが更埴市の遺跡の全容を知る手がかりとなることを考えると、貴重な調査のひとつだったといえよう。



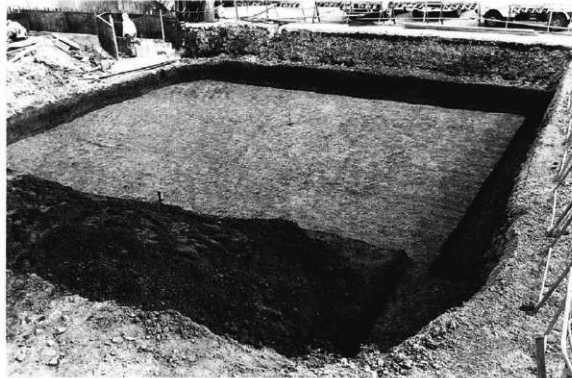
1 町浦遺跡 2 城ノ内遺跡 3 馬口遺跡

第79図 遺跡位置図 (1:10,000)



- I. 盛土層
- II. 青白色粘土層 (最近の水田。下層に鉄分沈殿)
- III. 砂層 (土層は褐色、下層は暗褐色)
- IV. 灰白色粘土層 (旧水田面)
- V. 褐色粘土層 (鉄分沈殿層)
- VI. 黒褐色粘質土層 (地山)

第80図 基本層序



第81図 調査区全景 (西より)

### 13 森將軍塚古墳 発掘調査

#### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 史跡 <sup>もりしょうぐんづかこぼん</sup> 森將軍塚古墳 (市No19 調査記号M9)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字森字大穴山3122-28他  
更埴市
- 3 原因及び  
事業者 公共事業＝史跡森將軍塚古墳保存整備事業 (第9年次)  
更埴市
- 4 調査内容 墳丘解体調査 (約300㎡)
- 5 調査期間 平成元年7月31日～同年9月2日 (27日間)
- 6 調査費用 総事業費60,000,000円 (国庫50%・県費15%補助)
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 (森將軍塚古墳発掘調査団)  
団長 岩崎卓也 副団長 森鳴 稔  
調査指導 木下正史 関根孝夫 松浦宥一郎 小林秀夫他  
調査主任 矢島宏雄  
調査員 滝沢 誠 那須利治 田中 裕 山根洋子他  
参加者 市川睦雄 小林千春 小林芳白他
- 8 種別・時期 古墳 (全長約100m前方後円墳) 古墳時代前期
- 9 遺構・遺物 前方部墳丘内石積11ヶ所  
出土遺物総数 埴輪片コンテナ (小) 1箱



第82図  
調査地位置図  
(1:10,000)

**II 墳丘解体調査** 本年度の発掘調査は、前方部復原工事に伴う墳丘解体調査を行った。前方部前面及び両コーナー付近の遺存する墳丘盛土を旧地山面または、岩盤面などの造成面まで盛土の除去を行い、墳丘盛土及び墳丘内石積みの調査を実施した。

前方部の解体調査は、昭和61年度にくびれ部寄りの約%が調査されている。今回も、これまでと同様に墳丘内石積みの検出が予想された。調査により、11箇所の墳丘裾部から墳丘頂部に向かって積まれた墳丘内石積みが発見された。しかし、前方部西側コーナー付近は、崩壊により明瞭な石積みは検出できなかった。

**前方部東側** 墳丘盛土は、泥岩破砕礫を盛土したもので、盛土は削り出した岩盤面に施され、東側コーナー寄りに3～4mの間隔で、3箇所の石積みにより区画されていた。石積みはいずれも裾から積み始めたものと、墳丘の途中から積まれたものとの2回に分けて積まれたものであった。上部の石積みは、泥岩角礫を多く用いていた。FEB6グリッドの岩盤には、幅約2m程の溝状に掘りくぼめた所が見られた。詳細は不明である。

**前方部前面** 前方部墳丘中心軸から西側は、ゆるい斜面となっており、また旧地山面が削り残されていた。前方部前面には、4箇所の石積みが発見された。

**前方部西側** 前方部西側の盛土下は、旧地山面を削り残しており、東側のように岩盤面は見られなかった。西側コーナー付近には、4箇所の石積みが発見されたが、裾部付近の石積みは崩壊により不明確であった。

本年度調査により、森將軍塚古墳の墳丘全域の墳丘盛土解体調査が終了し、多数の墳丘内石積みが発見された。今後の整理調査は、検出された石積みと墳丘盛土の関係＝墳丘築造過程を明らかにするという大きな課題が残るものとなった。

**III 保存整備工事** 本年度の保存整備工事は、昭和62・63年度と2年間中断した古墳本体復原工事を再開し、11月10日には古墳本体復原工事が完了した。史跡内整備工事は、3号墳及び12・13号組合式箱形石棺の復原工事、西側斜面の整備工事が行われた。



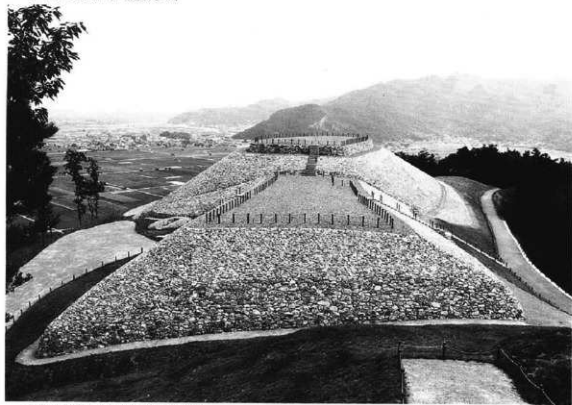
前方部東コーナー付近の墳丘内石積（南東側より）



前方部墳丘内石積（南側より）



3号墳の復原工事（南側より）



古墳本体復原工事完了（南側より）



## 14 湯ノ崎遺跡 試掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 湯ノ崎遺跡 (市No.78)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字桑原字湯ノ崎1906-1 他  
榎高栄開発
- 3 原因及び  
事業者 榎高栄開発 森 剛教
- 4 調査内容 試掘調査 (トレンチ5箇所)
- 5 調査期間 平成元年5月15日
- 6 調査費用 重機・作業員事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄  
協力者 下崎 広
- 8 種別・時期 集落址 古墳時代
- 9 遺構・遺物 古墳時代 住居址1棟  
出土遺物総数 土師器片20点

### II ま と め

計画地内に5箇所のトレンチを設定した。2トレンチにおいて、地表下40cmの黄褐色粘質土を掘り込む住居址が検出された。住居址覆土は、黒色土からなり、古墳時代の土師器片が含まれていた。他のトレンチは、耕作土下は黄褐色粘質土となり、遺構・遺物の検出はなかった。

当該計画地において、工事を実施する場合には、本遺跡の保護処置が必要である。なお、一本松古墳は現状保存が図られる計画である。



第83図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 15 東沖遺跡 試掘調査

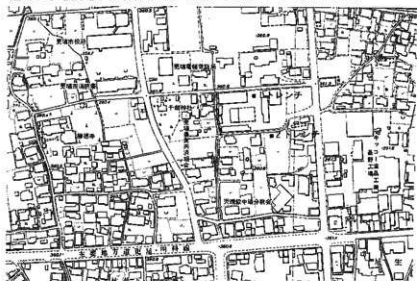
### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 ひがしおき 東沖遺跡 (市Na28-15)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字杭瀬下2-2  
土地所有者 中信建設
- 3 原因及び 民間住居址=店舗建設 (300㎡)  
事業者 中信建設 諏訪善太夫
- 4 調査内容 試掘調査(トレンチ2箇所)及び立会調査
- 5 調査期間 平成元年5月17日 (立会調査平成元年10月5日実施)
- 6 調査費用 重機事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 欠島宏雄
- 8 種別・時期 水田址・埋蔵文化財包含層 時期不明
- 9 遺構・遺物 水田址(?) 土器小片数点

### II まとめ

計画地内に2箇所のトレンチを設定した。1トレンチにおいて、地表下115~130cmと170~180cmに2面の水田址と考えられる土層が観察された。2トレンチにおいても70~110cmに、2面の水田址と考えられる土層が観察された。また110~140cmには、土器小片を含む埋蔵文化財包含層が確認された。

工事は、1トレンチ周辺で行われ、立会調査を実施した。2トレンチ付近で工事を実施する場合には、本遺跡の保護処置が必要である。



第84図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 16 粟佐遺跡群 試掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 粟佐遺跡群 (市No.28)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字小島字琵琶島3151-1  
土地所有者 永山建設㈱
- 3 原因及び 民間事業=集合住宅建設計画 (1,211.86㎡)  
事業者 永山建設㈱ 永山勝利
- 4 調査内容 試掘調査 (トレンチ7箇所)
- 5 調査期間 平成元年5月25日
- 6 調査費用 重機事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期 埋蔵文化財包含層 時期不明
- 9 遺構・遺物 遺構なし 土器小片数点

### II まとめ

計画地内に7箇所のトレンチを設定した。以前にあった建物建設時に擾乱されており、わずかに埋蔵文化財包含層が残存するのみであった。包含層は、計画地敷地の南側境から1m、西側で1.5m、北側で3mの幅で、地表下35~90cmに茶褐色粘質土層中に土器小片が出土したことから確認された。本土層下は、黄褐色粘質土または砂層となっていた。

当該計画地において、工事を実施する場合には、立会調査が必要である。



第85図  
調査地位位置図  
(1:5,000)

## 17 湯屋遺跡 試掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 湯屋遺跡 (市No71-4)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字桑原宇湯屋1651  
湯河本シャーリング 長野市川中島町今井1780
- 3 原因及び  
事業者 民間事業=駐車場等造成事業 (2,946㎡)  
湯河本シャーリング 河本龍男
- 4 調査内容 試掘調査 (トレンチ3箇所)
- 5 調査期間 平成元年9月6日
- 6 調査費用 重機事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当 佐藤信之
- 8 種別・時期
- 9 遺跡・遺物 なし

### II ま と め

計画区域内に3ヶ所のトレンチを設定し調査を行った。表土下1mほどに暗褐色の包含層にあたると思われる土層が観察されたが遺構遺物の検出はなかった。2mまで掘り下げたが、下部は佐野川の堆積と思われる砂礫層が観察され、遺物の出土はなかった。



第86図  
調査地位位置図  
(1:5,000)

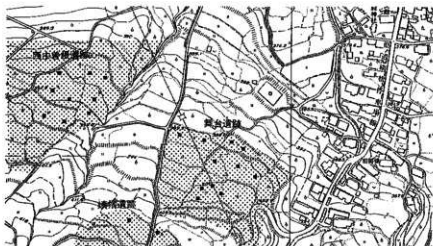
## 18 舞台遺跡 試掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 舞台遺跡他 (市No.107)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字八幡字舞台・西中曾根・姨捨  
高橋政幸 他
- 3 原因及び  
事業者 公共事業=県営は場整備事業  
長野地方事務所
- 4 調査内容 試掘調査(トレンチ25箇所)
- 5 調査期間 平成元年10月30・31日(2日間)
- 6 調査費用 事業者負担90,210円 全額事業負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期 集落址  
弥生時代後期~平安時代
- 9 遺構・遺物 不明掘り込み・弥生時代土器片多数

### II まとめ

来年度は場整備が予定されている地区には、舞台遺跡・西中曾根遺跡・姨捨遺跡がある。調査は遺跡内に25ヶ所のトレンチを設定し行った。姨捨遺跡では遺構・遺物の検出はなかったが、舞台遺跡では多量の箱清水式土器と、僅かに須恵器が出土し、西中曾根遺跡からは、僅かに遺物が出土したため、来年度本調査が必要である。



第87図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 19 諏訪南沖遺跡 試掘調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 粟佐遺跡群諏訪南沖遺跡 (市No.28-9 調査記号SMO)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埭市大字粟佐字諏訪南沖  
更埭市
- 3 原因及び  
事業者 公共事業=市道粟佐橋線建設計画 (3,790㎡)  
更埭市 担当 建設課
- 4 調査内容 試掘調査 (トレンチ7箇所)
- 5 調査期間 平成2年1月16日
- 6 調査費用 31,518円 市負担
- 7 調査主体者 更埭市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期 集落址  
古墳時代~平安時代
- 9 遺構・遺物 遺物なし  
遺構住居址床面 水田址

### II ま と め

7ヶ所のトレンチの内、1・2トレンチでは地表下40~60cmほどの部分に包含層があり、遺物の出土はなかったが、ピット状の掘り込みと住居址の床面と思われる部分が検出された。また4・5トレンチでは地表下90cmほどの部分に、水田址と思われる灰色粘土層が観察できる。

調査の結果、現在畑地としている部分には集落址が、水田部分には水田址が存在するものと思われ、工事にあたっては発掘調査が必要である。



第88図  
調査地位位置図  
(1:5,000)

## 20 小島遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 こじま 小島遺跡 (市No206)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字桜堂字桜田513-1  
土地所有者 唐木田豊秋
- 3 原因及び 民間事業=店舗建設事業 (158,33㎡)  
事業者 唐木田豊秋
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年4月5日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 特別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II まとめ

調査地は駅前通りに面した部分であり、地表面40cmほどはすでに擾乱されていた。80cm～1mほどに暗灰色の砂層があり、その下は砂礫層となり、遺構・遺物の検出はなかった。



第89図  
調査地位置図  
(1:5,000)

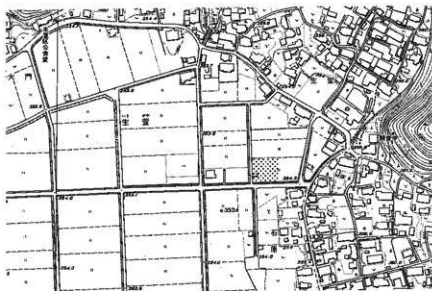
## 21 生萱石原遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 いしがけいしはら 生萱石原遺跡 (市No.191)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字生萱字但馬497  
土地所有者 野澤幸利
- 3 原因及び 民間事業=倉庫建設事業 (1,377㎡)  
事業者 ㈱八幡商事 小宮山 寛
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年4月13日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体名 更埴市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II まとめ

工事は地表下50cmほどの掘り下げであったが、耕作土下は泥炭層となり遺構・遺物の出土はなかった。



第90図  
調査地位要図  
(1:5,000)



## 22 竜王遺跡 立会調査

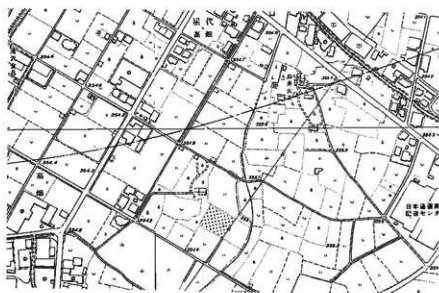
### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 <sup>ヤしろ</sup>屋代遺跡群<sup>りゅうおうまろ</sup>竜王遺跡 (市No.31-10)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字屋代字高畑1488-1  
日本梱包運輸倉庫㈱
- 3 原因及び  
事業者 民間事業＝倉庫建設事業 (2,482㎡)  
日本梱包運輸倉庫㈱ 黒岩恒雄
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年4月17日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期 水田址 時期不明
- 9 遺構・遺物 水田址(?) 遺物なし

### II まとめ

当該地は、竜王遺跡・窟河原遺跡の隣接地であるために基礎工事時に立会調査を実施した。旧水田面上に120cm程の盛土が行われ、既設建物敷地のアスファルト面となっている。旧水田層下30cmと50cmのところに、水田層と思われる鉄分の溶脱した灰褐色粘質土と鉄分の集積した褐色粘質土の連続する土層が2面観察された。

工事は、盛土の上コンクリート製基礎杭を打設して行われた。



第91図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 23 土口北山遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 どぐらきたかや 土口北山遺跡 (市No193)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字土口字北山17-1 他  
土地所有者 長野県
- 3 原因及び 公共事業=宅地造成事業 (2,410.88㎡)  
事業者 長野高速道事務所
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年4月20日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II まとめ

当該地の周辺においては、地表面80cm程に埋蔵文化財包含層のあることが、以前の試掘調査で確認されている。

当該造成工事は、地表面の整地及び土留壁を設けたものである。また、木造住宅建設のため基礎も浅く、工事は埋蔵文化財包含層まで達しないものであった。



第92図  
調査地位位置図  
(1:5,000)

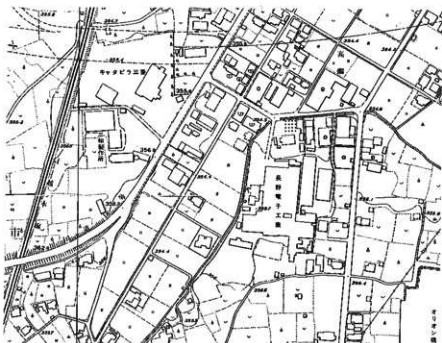
## 24 城ノ内遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群城ノ内遺跡 (市No31-7)
- 2 所在地及び土地所有者 長野県更埴市大字屋代字城ノ内1468-1他  
堀川産業株式会社
- 3 原因及び事業者 民間事業=工場建設事業 (100㎡)  
堀川産業株式会社長野支店 堀川勲夫
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年5月17日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II ま と め

当該地は、旧水田面上に約50cmの盛土が行われ、工場敷地面となっている。当該工事は、基礎部分で、敷地面より80cmの掘削工事が行われたもので、埋蔵文化財包含層まで工事は達しないものであった。



第93図  
調査地位位置図  
(1:5,000)

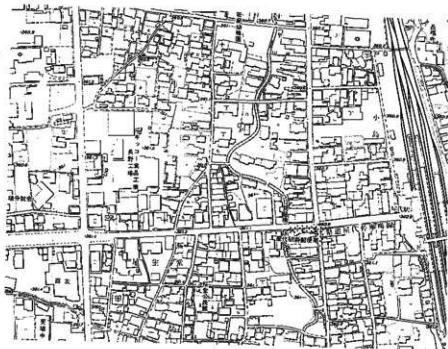
## 25 小島遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 小島遺跡 (市No.206)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字小島字琵琶島3147-2 他  
長野県
- 3 原因及び  
事業者 公共事業=県道拡幅改良事業  
更埴建設事務所
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年8月1日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II ま と め

集水升建設のため3mほどまで掘り下げたが、表土下80cmほどまではすでに攪乱されており、2mから2m40cmほどまでは暗黄褐色粘土層が、それ以下は暗灰色粘土が厚く堆積しており、遺構・遺物の検出はなかった。



第94図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 26 元町遺跡 立会調査

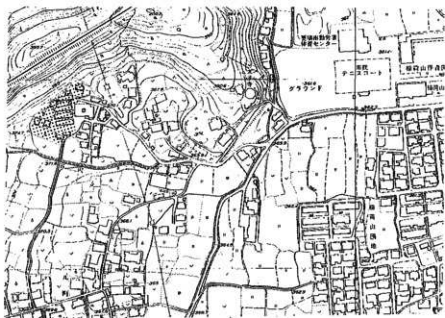
### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 元町遺跡 (市No74)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字桑原字湯之崎1956-1 他  
街高栄開発
- 3 原因及び  
事業者 民間事業=宅地造成事業 (3,099.94㎡)  
街高栄開発 森 剛教
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年8月17日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II まとめ

当該地は、以前の工場建設時に一度造成されたところである。今回の造成工事により、沢により堆積されたところであることが明らかとなった。

当該工事部分には、埋蔵文化財は確認されなかった。



第95図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 27 後安遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 後安遺跡<sup>ごあん</sup> (市No71-2 調査記号GAK)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字桑原125他  
土地所有者 榎風間鉄工 更埴市大字稲荷山174-10
- 3 原因及び 民間事業=工場建設事業 (100㎡)  
事業者 榎風間鉄工 風間 隆
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年10月3日~同年10月4日 (2日間)
- 6 調査費用 作業員事業者負担
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期 集落址 古墳~奈良時代
- 9 遺構・遺物 住居址2棟・土坑1基 古墳~奈良時代  
出土遺物総数 土器片コンテナ1箱

### II ま と め

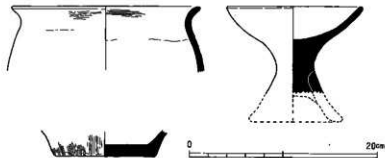
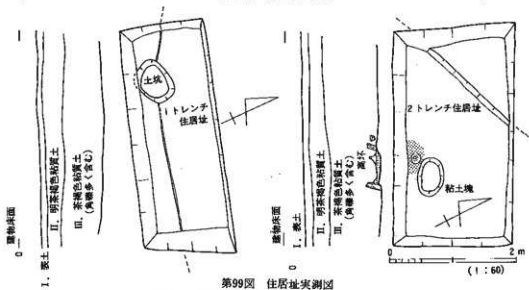
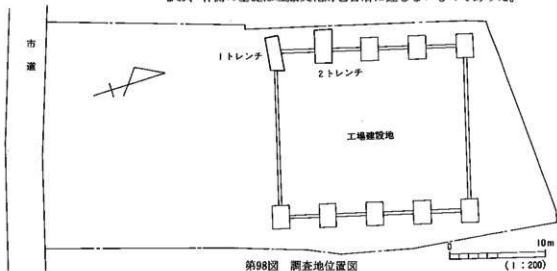
当該工事の基礎掘削時に立会調査を実施したところ、山側の基礎部分に住居址が検出されたので、急遽工事を中止し掘削部分の発掘調査を実施した。基礎工事は建物床面より150cm掘削し行われたもので、1・2トレンチ部分では、建物床面より約70cm以下は、角礫を多く含む茶褐色粘質土の埋蔵文化財包含層となり、住居址床面までの工事となった。

- 1・2トレンチ 1トレンチでは、住居址の南側壁と住居址を切る土坑が検出された。2トレンチでは、住居址の北側壁と石組みのカマドが検出され、カマドは高



第96図  
調査地位図  
(1:5,000)

坏を伏せて支脚としていた。また近くから粘土塊が出土した。  
 なお、谷側の基礎は埋蔵文化財包含層に達しないものであった。



## 28 更埴条里水田址 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 更埴条里水田址 (市No29)
- 2 所在地及び  
土地所有者 榑フジ総業  
長野県更埴市大字屋代字細越401-1 他
- 3 原因及び  
事業者 榑フジ総業 近藤 洵  
民間事業=宅地造成事業 (1,196.03㎡)
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年11月14日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期 水田址・埋蔵文化財包含層 時期不明
- 9 遺構・遺物 水田址・落込み 土器小片1点

### II ま と め

当該地の現況水田面下25～40cmに水田層と考えられる土層が、40～55cmに黒褐色粘質土の落込みがみられ、焼土・土器小片が観察された。

当該工事は、盛土造成を行い木造住宅を建設するもので、埋蔵文化財包含層への直接の影響はないものである。



第100図  
調査地位置図  
(1:5,000)



## 29 小島遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 まじま 小島遺跡 (市No206)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字小島3055-21他  
更埴市
- 3 原因及び  
事業者 公共事業=自転車置場建設事業 (1,344,53㎡)  
更埴市 担当 建設課
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年12月9日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II ま と め

工事区は旧国鉄の用地であり、攪乱が激しく、また盛土も厚いため、安定した土層は確認できなかった。



第101図  
調査地位置図  
(1:5,000)

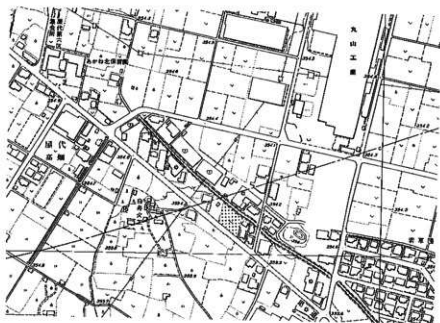
### 30 窪河原遺跡 立会調査

#### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群窪河原遺跡 (市No31-17)
- 2 所在地及び 長野県更埴市大字雨宮字窪河原650-1  
土地所有者 岩佐靖文
- 3 原因及び 民間事業=駐車場造成事業 (1,098㎡)  
事業者 岩佐靖文
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成元年12月25日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 矢島宏雄
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

#### II ま と め

当該工事は、約1m程の表土を撤去し山砕盛土により駐車場を造成するものである。表土は、茶褐色砂質土が80cm程あり以下茶褐色粘質土となっており、当該工事部分には埋蔵文化財は確認されなかった。



第102図  
調査地位置図  
(1:5,000)

## 31 小島遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 キビノ 小島遺跡 (市Na206)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埭市大字小島字大門下3145-2  
市川つね子
- 3 原因及び  
事業者 民間事業=店舗建設事業 (597,669㎡)  
市川 泉 更埭市大字桜堂523-53
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成2年2月3日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埭市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II ま と め

基礎部分の掘り下げ時に調査を実施した。地表下60cmほどまではすでに攪乱されていたが、部分的に残った部分からは、宅地として利用される前の水田面が観察できる。地表下1mほどの部分にもう一層水田址と思われる灰褐色の粘土層があるが、出土遺物がないため時期は不明である。その下は砂層となり、遺構・遺物は検出されなかった。



第103図  
調査地位位置図  
(1:5,000)

## 32 湯屋遺跡 立会調査

### I 調査の概要

- 1 調査遺跡名 桑原遺跡群湯屋遺跡 (市Na71-4)
- 2 所在地及び  
土地所有者 長野県更埴市大字桑原字湯屋1654他  
富田 康
- 3 原因及び  
事業者 民間事業=仮設住宅建設事業 (1,057㎡)  
西松建設㈱・安藤建設㈱共同企業体 志水尚偉
- 4 調査内容 立会調査
- 5 調査期間 平成2年3月30日
- 6 調査費用 なし
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会 担当者 佐藤信之
- 8 種別・時期
- 9 遺構・遺物 なし

### II ま と め

工事は仮設プレハブの建設であり、畑地にビニールシートを敷いて盛土をしており、下部への掘り下げはなかった。



第104図  
調査地位置図  
(1:5,000)

**更埴市埋藏文化財調査報告書—平成元年度—**

---

発行日 平成2年3月31日

発 行 更 埴 市 教 育 委 員 会

〒387 長野県更埴市大字杭瀬下84番地

TEL (0262) 73-1111

印 刷 信 毎 書 籍 印 刷 株 式 会 社

〒381 長野県長野市西和田470

TEL (0262) 43-2105

---

